紀伊国伊都郡橋本町の町並みの構成とその形成過程

THE DEVELOPMENT OF THE URBAN STRUCTURE OF HASHIMOTO TOWN

藤川 昌樹*, 平山 育男**, 御船 達雄***

Masaki FUJIKAWA, Ikuo HIRAYAMA and Tatsuo MIFUNE

The purpose of this research is to clarify the spatial composition and the process of formation of the old inner-city of Hashimoto in Wakayama Prefecture based on analyses of historic records. The town of Hashimoto was founded in 1585 by a famous Koyasan monk, MOKUJIKI Ogo. There were 83 households by 1601, which seemed to have composed Nishi-machi, Yoko-machi and Naka-machi along the Yamato Highway. As the number of households in Hashimoto increased, houses spread to Ura-machi and Kawara-machi away from the highway, where people were obliged to bear only half the taxes burdened by those who lived along the highway. On the other hand, though there were merely 5 households in 1601 in Kosada-mura located next to Hashimoto, its population increased rapidly through the 17th and the 18th century consequently enlarging the town area, which was linked to the area of Hashimoto. Thus, the social and spatial structures of Hashimoto became complex.

Keywords : Town house, Rural town, Neighborhood group, Urban structure, MOKUJIKI Ogo

はじめに

和歌山県橋本市の市街地中心部(旧紀伊国伊都郡橋本町)には、今もなお魅力的な伝統的町並みが遺されている。しかしながら、この町並み一帯は土地区画整理事業の対象となっており、計画通りに事業が進めば、いずれは全面的に取り壊される運命にある。

筆者らは1998年から2002年にかけて、この町についての町並み調査を行う機会を得た¹⁾。この調査は町と町家の現状を記録して後世に伝えることを直接の目的としているが、筆者らは同時にこの作業によって町並みの価値を再評価し、部分的にでも町並みを保存・継承するような事業が実現すればとも考えている。本論文は、こうした活動の一環として、橋本の町並みの形成過程を解明し、改めて町の歴史的な特徴・価値について考察を加えようとするものである。

橋本町は、天正13年(1585)に木食応其により高野往還のための「宿所」として町立てされた在郷町として知られる(図1)。町の中心部には応其が開いた応其寺が立地し、町立ての功労者が誰であるかを物語っている。橋本町は同15年には塩市を開催する特権を、文禄3年(1594)には諸役免除の特権を豊臣秀吉より与えられた。慶長5年(1600)より浅野氏(幸長・長晟)の支配下となり、元和5年(1619)以降幕末までは徳川氏の領地となったが、上の二つの特権は継続して認められた。徳川氏の支配下では、城下町である和歌山、付家老安藤・水野両氏の本拠地で城下町に準ずる田辺・新宮とならび、橋本は町方として扱われ

ている²⁾。ただし、諸役が免除されたとはいえ町は伝馬役を負担したため、町内には伝馬所が設置された³⁾。また、紀州藩の参勤交代時の宿駅としても機能したため、藩の御殿(のち郡奉行役所)も置かれた⁴⁾。

このような歴史を持つ町として、橋本については市史・県史をはじめとする地方史誌において触れられているほか、近世の塩流通や在方商業の事例として取り上げた研究などが発表されている⁵⁾。近世の在郷町として、既に一定の歴史上の位置づけがなされているといえよう。

だが、この町の形成過程をめぐっては、空間的な側面に限っても次のような課題がなお残されている。

第一は、木食応其による町立て当初の具体像がほとんど不明なことである。たとえば、『和歌山県史』は近世初期の橋本について、「橋本は、慶長6年(1601)のころは人家五軒にすぎなかった」と記している⁶⁾。しかし、町立て後16年を経た時期に5軒の人家しか存在していなかったとすれば、果たして本当に天正年間に町立てが行われていたかどうかさえ疑わしいことになるだろう。これまでの研究水準では、天正13年の町立ては実は伝説の域を出ないとさえ言えるのである。

第二は、橋本の住民社会の構成と町並みとの関連が解明されていないことである。橋本町内には、中町・川原町など複数の「町」が存在し⁷⁾、後述のように天保2年(1831)には、古佐田村と併せて473軒もの世帯が居住していた。在郷町として一定の規模を誇っていたのであり、当然に様々な職種・階層の人々が複雑な社会を構成していたものと推

* 筑波大学大学院 助教授・博士(工学)

** 長岡造形大学 助教授・博士(工学)

*** 和歌山県文化財センター 技師・博士(工学)

Assoc. Prof., Univ. of Tsukuba, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Nagaoka Institute of Design, Dr. Eng.

Center for Cultural Properties in Wakayama Prefecture, Dr. Eng.

図1『紀伊国名所図会』に描かれた橋本

測される。こうした住民社会の構成と少しでも関連づけた町並みの理解が求められるであろう。

第三は、古佐田村との空間的な関係が不明瞭なことである。橋本町は、古佐田村領内の荒地に町立てされたこととされる。しかし、近世後期の段階で既に両者は連続した町並みを形成していた⁹⁾。また、両者の密接な関係は空間的な面にとどまらず、各種の争論に際し協調して行動するなど町の運営面にまでも及んでいた⁹⁾。したがって、古佐田村をも視野に入れた上で橋本町の形成過程を解明する必要があるだろう。

本論文の目的は、これらの課題に答えることを通して、現在みられるような橋本の町並みの空間構成が如何なる過程を経て形成されてきたかを明らかにすることにある。以下では、まず明治初期の地籍図及び屋敷地の書上げを主史料とし、町並みの構成上の特徴について述べると共に、形成過程についての仮説を導出する。そして、その上でこの仮説を新出の文献・絵図史料を用いて検証して行くことにする¹⁰⁾。

1 町並みと屋敷地の構成

1) 地籍図にみる町並みの構成

近・現代の市街地拡大により、前近代の段階で橋本の町がどのような町並みの構成を取っていたか現況では分かりにくくなっている。したがって、復元的な考察を進めていく必要があるが、その際に有力な手がかりを与えてくれるのが、明治初期に描かれた橋本町の地籍図(「橋本村屋鋪地并二新畑之図」、図2)¹¹⁾である。同図からは、橋本町の構成について、多くの情報を読みとることができる。

同図においてまず注目されるのは、旧大和街道の両側に短冊型の屋

図3 旧街道と「川原町」(手前)の高低差

図4 旧街道(手前)と「裏町」の高低差

敷地が並び、いわゆる両側町を構成していることであろう。旧大和街道は屈曲しながら東西に橋本を貫いているが、この屈曲に合わせて短冊型屋敷地も連続しているのである。

現在の地籍図では、橋本の旧市街地は「中町」「西町」「川原町」「裏町」の4つの小字から構成されているように描かれている。だが、旧大和街道が屈曲し応其寺正面にあたる筋一帯を、近世後期には「横町」と称していた¹²⁾。橋本町は計5つの小字から構成されていたとみるべきであろう。旧大和街道に沿った両側町の部分は、この5つの小字のうち「中町」「横町」「西町」に相当することになる。現況でも、旧街道沿いの両側には伝統的な町家が建ち並んでいる。旧街道が橋本町の空間的な構成において主軸となっていたのである。

この旧街道と交わる二本の副的な都市軸の存在にも触れておきたい。一つは応其寺から御殿に至る道で旧街道の屈曲箇所と多くが一致する。もう一つは浄泉寺と紀ノ川を結ぶ道であり、旧街道とは直交する。浄泉寺自体は古佐田村に属したが、参道は橋本町内を通り、この参道が紀ノ川に至った地点に船荷の上げ下ろしを行なうバンドコ^(船所カ)が設けられていた。17世紀末～18世紀中期にはこの二本の道に沿って塩問屋が集中して立地したことが確認されるから¹³⁾、旧街道が橋本町の主軸であるとすれば、二本の道は副軸を構成していたといえるだろう。

一方、両側町の西南部一帯(図中左下部分)には、赤い○印が付された屋敷地が集中して存在する。図の凡例には、「番号肩二〇印ヲ加、新畑ヲ記ス」とあり、この一群の屋敷地が「新畑」なるものを示すことが判明する。先の小字との対応をみると、「新畑」が立地する地区は「川原町」の領域とほぼ一致していることがわかる¹⁴⁾。

図2「橋本村屋鋪地并二新畑之図」(土屋家文書[橋本市立郷土資料館寄託]、明治初期)

同図は、各敷地の用途が宅地・畑のいずれであるか色を変えて描き分けているが、紀ノ川に接した一画を除くと、「新畑」のほとんどが「宅地屋敷」となっている。したがって現状ではもちろん、明治初期の段階でもこの川原町一帯は市街地化されていたことになる。「新畑」の土地利用上の違いを認めることはできない。しかし、「新畑」と記された敷地群は、旧大和街道には接することがなく、先に指摘した旧街道沿いの両側町とは重なりのない領域を形成している。両者は土地制度上は明らかに違うものとして認識されていたことになる。

この事は、両者の地盤面の高さが異なる事と対応している。旧街道の地盤面と比べると、川原町の地盤面は1M程度低くなっているのである。このため、旧街道沿いの町家の敷地では、街道に接する表側と川原町に接する裏側で高低差が生じることになり、この高低差を石垣を用いて解決する結果となっている（図3）。

以上をふまえ、敷地の多くに「新畑」という名称が与えられていることを考慮して、この川原町の一帯が中町・横町・西町よりも相対的に新しく開発された土地ではないかとまずは推測しておきたい。

5つの小字のうち残る「裏町」は、中町・横町・西町の北側に位置する。裏町は旧街道沿いの町々より2～5M高い地盤面に位置している（図4）。応其寺のように、町立て間もない時期から存在したと思われる施設もこの地区内には位置しているものの、「裏町」という名称から判断して、この一帯も基本的には旧街道沿いの部分よりは若干成立が遅れるのではないかと見当をつけておきたい。

一方、地籍図は古佐田村を直接の描写の対象としていないが、北・東・西の三方には「古佐田村境」と記入している¹⁹⁾。ただし、先述のように橋本町と古佐田村は実質的に連続した市街地を形成していたとみられ、江戸時代末頃古図（図5）¹⁰⁾もそのように描いている。

以上のように旧橋本町は明治初期の時点で、①旧大和街道に沿った両側町（中町・横町・西町）、②「新畑」からなる地区（川原町）、及び③それらの背後の一段高い地区（裏町）の三つから主として構成され、古佐田村とも連続した市街地を形成していたことをみてきた。そして①が古く、②③が相対的に新しい存在と推定されるのではないかともしてきた。このような推定を史料に即して検討する前に、ついで個々の屋敷地の形態上の特徴や敷地数をみておくこととした。

2) 「御免許地屋鋪写」にみる屋敷地の構成

橋本町の屋敷地を一筆毎に記す史料として「御免許地屋鋪写」（明治2年[1869]、以下「屋鋪写」）¹⁷⁾は極めて有用である。この屋鋪写は、前述の地籍図と地番がほぼ一致しており、作成年代に若干の相違があるものの、基本的には対をなすものである。その代表的な書式は、

四 一、屋敷 表口貳間半 裏行拾貳間 御帳 治右衛門 大 藤兵衛

のようであって、地番・地目・表口寸法・裏行寸法がまず記される。ただし、「表口」「裏行」という記載は、旧大和街道に直接面した屋敷地にもみ用いられた記載方法である。裏町の敷地群をはじめとして、街道に直接面しない屋敷地には、代わりに「東西」「南北」と記されている。その敷地が街道に接するか否かを書き分けることが重要だったのであろう。なお、屋鋪写に記された計213の敷地のうち、前者は140、後者は73をそれぞれ占めている。

次の「御帳」とは検地帳を指し、この例では検地帳¹⁸⁾に記されていた所有者の名称が「治右衛門」だったことを示している。そして、最後に記された「藤兵衛」が、明治2年段階での所有者を示している。「藤兵衛」の肩に記された「大」は、藤兵衛の屋号の略称とみられる。

しかし、この屋鋪写が橋本町の全ての屋敷地を記載しているわけではない。屋鋪写に記された地番と先の地籍図の地番を対照させると、屋鋪写は旧街道沿いの両側町の中町・横町・西町を構成する屋敷地や、裏町の屋敷地についてのみ記していることがわかる。先に見た川原町に広がる「新畑」の屋敷地群は取り上げられていない。

図6は、屋鋪写に記された213の敷地の表口（東西）・裏行（南北）寸法にもとづき、敷地の規模別分布をみたものである。表口（東西）方向では半間間隔で集計してある。このうち、表口・裏行で寸法が表示された屋敷、すなわち旧大和街道沿いの敷地は、表口が2間半から3間半で、裏行が7間から13間程度のものが多いことがわかる。これに対し、東西・南北寸法で表記された裏町等の屋敷地規模は広く分散しているが、相対的に東西寸法が長く、また南北寸法が短い傾向にある。

以上の敷地規模の傾向を解釈するにあたって注意すべきは、多くの敷地で敷地の分割が行われたのではないかと推定されることである。各敷地の地番には、「式之内」「四之内」のように、「之内」という表現が添えられたものが多い。地番自体が付された時期はおそらく17世紀には遡ると推定される¹⁹⁾。この番号が最初に付された時点では、例えば「式」及び「式之内」という二つの敷地は一体のものだったと理解すべきであろう。地番の数字自体が1から103までということは、その時点で103の敷地が存在したと見てよいだろう。そしてその後敷地の分割が行われた結果、記された屋敷地の総数は前述のとおり計213に達したものとみられる²⁰⁾。分割は、103の敷地のうち、実に64の敷地で行われており、また、敷地の表口・裏行方向のいずれにおいても行われている。したがって、個々の敷地はもとは図6でみられる敷地規模よりも全体として大規模であったことになる。

さて、この地番を手がかりに、町内の如何なる場所にいくつの屋敷

図5 「(橋本古図)」の橋本・古佐田

図6 敷地規模分布

地が古くから存在したかを推定しておきたい。地籍図と対照させると、まず、1から82番までの地番のうち34・65・68を除いた番号の敷地が旧大和街道沿いの敷地である。したがって地番が振られた段階では街道に接して79筆の敷地が存在したと思われる。これに対し、83番から99番の敷地は裏町に所在する。同様に地番が振られた時点では17筆の敷地が存在したのだらう²⁾。

表1は、旧街道沿いの79筆の屋敷地が分割される前の表口寸法を推定復原・集計したものである。ここでは5-7間程度の表口のものの数が多かったことに注目しておきたい。この寸法は図6で多数を占めた表口2間半-3間半の2倍の寸法にあたるからである。当初は比較的表口の広がった敷地が表口方向に分割・利用され、結果として町並みの密度が高くなって行ったという変化を想定することができる。

このような屋敷地数やその変化を念頭におきつつ、次にこれまで述べてきた町並みの形成過程についての仮説を史料に則しつつ確認していくこととしたい。史料にみえる家数を検討することから始めよう。

2 町並みの形成過程

1) 家数の変化

17世紀初頭の家数を記す史料 表2は、各種の史料に登場する家数・人口をまとめたものである。同表から明らかなように、橋本の家数・人口ともに古佐田村と合計のうえ記載されることが多い。これは橋本と古佐田が実質的に連続した町並みを構成していたことと関係があるものと思われる。また、各史料毎にその作成目的が異なるはずなので慎重に数字をみるべきである。

表1 地番をもとに復原した旧大和街道沿い敷地の表口

表口	0~	1~	2~	3~	4~	5~	6~	7~	8~	9~	10~	11~	12~	13~	14~	計
筆数	0	0	3	11	12	18	16	7	3	2	3	2	0	1	1	79

表2 橋本町・古佐田村の家数・人口

	橋本			古佐田			橋本・古佐田計	
	本役	半役	家数計	本役	庄屋 肝煎	無役	家数計	人口
慶長6年(1601)*1			83				5	88
元和5年(1619)*1								93
寛永19年(1642)*2			129				5	134
慶安4年(1651)*3	57			5				148
寛文3年(1663)*1								175
享保元年(1716)*4	93	125	218	12	2	85	99	317
天保2年(1831)*5			275				198	473
天保10年(1839)*6								390
安政元年(1854)*7								408
明治7年(1874)*8			293 ¹¹⁾ (1,170)					
昭和3年(1928)*9			253					

*1)「書上申家数之事」(応其寺文書450、橋本市史編纂委員会蔵写真版)、*2)「(家数改)」(応其寺文書317、橋本市史編纂委員会蔵写真版)、*3)「慶安四年十月伊都郡上組在々田島小物成改帳控」(土屋家文書、『橋本市史』上巻、pp.800-801)、*4)「享保元年御巡見様御尋之時に可申上口上書覚」(関谷家文書、『橋本市史』中巻、p.404)、*5)「切支丹宗門改判取帳等」(応其寺文書315)、*6)「紀伊統風土記」巻之四十五、*7)「本宿橋本町と助郷東家・寺脇岡村と出入二付、橋本町惣代奉願書」(池永家文書、『橋本市史』中巻、p.422)、*8)「戸籍人員帳」(土屋家文書312、橋本市史編纂委員会蔵写真版)、*9)内は人口、*10)8才より上の人数との注記あり、*11)内は人口を示す。

表3 天保2年(1831)小字別の世帯数

	橋本町										古佐田村					
	西町	儀町	中町	橋本町	河原町	裏町	23	26	18	15	27	16	27	20	26	26
世帯数	15	9	14	14	12	14	15	16	15	9	16	15	13	13	11	20
小計1	38	26	60		92	59										
小計2			124													
小計3				275												
総計					473											

まず、慶長・元和・寛文年間の家数について説明しておきたい。これらはいずれも次の史料²⁾をもとに記入したものである。

書上申家数之事
棟数合百七拾五軒
内わけ
八拾三軒 先代御検地之時有家
五軒 右同断小佐田村有家
八拾七軒 増家
内
五軒 御検地より御入国迄増家
八拾貳軒 御入国より以後出来仕候
右之通書上申二偽り無御座候、以上
寛文三年
卯二月
東家 太兵衛殿

この史料によれば、寛文3年(1663)の時点での家数は、橋本町・古佐田村を合計して175軒であった。そして、「先代御検地」の時点での家数は、橋本町で83軒、古佐田村で5軒であったという。

この「先代御検地」とは、慶長6年(1601)に浅野幸長により和歌山藩領全体で実施された検地を指すと考えられる。したがって、検地帳自体は未発見であるが、橋本町でも同時期に検地が行われたとみて良いだろう。この検地では「家改め」も同時に実施されており、上の史料に記された検地の時の家数とは、この家改めの結果とみられる。

それでは、その家数とは何を示すのであろうか。『和歌山県史』によれば、この家改めでは、「本百姓にあたる本役・役・役人・役家だけでなく、庄屋・肝煎・ありきをはじめ、無役・後家・うば・やもめ・隠居・としより・おうち(ほうし)・寺・大工・かじ屋・下人・被官・皮田・おんぼうなどが記載され」た²⁾。したがって、当時の村や町に居住した全ての「世帯」の数が書き上げられていたものと推定される。

なお、古佐田村については、この家改めの結果が別の史料に残されている²⁾。同史料によれば、古佐田村には当時、寺1軒、隠居1軒、役人1軒、後家2軒の計5軒の家々があり、その家数の総計は上に引用した書き上げと一致することになる。この書き上げの記載は信憑性が高いと言って良いだろうし、また橋本町の家数とは古佐田村のように様々な階層の世帯を含む数値であったと推測可能であることになる。

続けて上の書き上げは、慶長検地から史料の作成された寛文3年までに87軒の家が増えたことを記している。そして、そのうち5軒が「御入国」すなわち元和5年(1619)の徳川頼宣入国までに増えた家だとしているのである。

形成過程の検討 このようにして17世紀初頭から20世紀前半に至る家数の変化を追うことが出来る。表2からは、17世紀後半に急激な家数の増加がみられたこと、19世紀半ば以降家数が減少にむかったことなどをうかがうことができ興味深い²⁾、町並みの形成過程の解明という観点から、本論文では次の3点に特に着目したい。

第一は、先にもみたように、検地が行われた慶長6年の段階で、既に83軒もの家数が確認される点である。同年にこれだけの家数が存在したとなれば、天正13年に町立てされたという通説はおそらく正しいと判断できよう。また、町立てから16年を経たばかりなので、この数値をもとに開発当初の町並みの規模を推測することも可能であろう。

83軒という数値に関連して注目されるのは、前項での明治2年の屋敷地の分析により、おそらくは17世紀の段階で大和街道沿いに79筆の敷地があっただろうと推測されたことである。この慶長6年段階の軒数と数量がほぼ一致しているからである。もちろん、敷地数と世帯

数は直接の関係を持たないから、数値の対応状況を厳密に検討することにさほど意味があるわけではない。だが、17世紀初頭の時点で大和街道沿いの屋敷地群、すなわち中町・横町・西町のほとんどが既に成立していたと推定しても矛盾がなくなることを確認しておきたい。

また、この段階では古佐田村の家数が5軒と橋本町のそれと比べて著しく少ないことにも触れておくべきであろう。しかも、先に見たように寺・隠居・後家なども含めてこの数であるから、古佐田村は自立した村とは言にくいような状況だったと思われる。前述のように、古佐田村の内に橋本町が町立てされたと伝えられているが、この段階では古佐田村は橋本町に依存するような状態だったのではないか。

第二は、17世紀後半以降に急激に家数が増加し、これに伴い市街地も拡大したとみられることである。家数の増加は18世紀にも継続したようであり、天保2年(1831)の宗門改帳²⁶⁾によれば、同年には橋本・古佐田にあわせて473もの世帯が居住するに至っていた。なお、この時点で既に橋本に西町・横町・中町・河原町・裏町の五つの町があり(表3)、それぞれが2～7の組により構成されていたことが判明する。そして世帯数では大和街道の背後に位置する川原町・裏町が計151世帯で、街道沿いに立地する西町・横町・中町の家数124を凌駕していたことも知られる。また、17世紀初頭に5軒のみだった古佐田村の家数が、同年には実に計198世帯を数えるに至ったことも注目値する。

寛永19年(1642)までの家数の増加は橋本町にのみみられるし、同年の家数は天保2年の中町・横町・西町の総家数とほぼ同じである。したがって、17世紀半ばまでの町並みの変化は屋敷地の分割等による街道沿いの町々の高密度化や川原町・裏町への若干の宅地の浸出に限られていたのだろう。しかし17世紀後半以降の急激な家数の増加に伴い²⁷⁾、街道沿いの町々から溢れ出た家々の受け皿として、川原町・裏町さらには古佐田村までもが急速に都市化して行ったと考えられる。

第三に、以上と関連して、慶安4年(1651)と享保元年(1716)の二度の調査の記録に注目しておきたい。両度の調査において、人々が負担した「役」についての記載がみられ、当時の住民社会の構成を推測する手がかりとなるからである。

慶安4年(1651)10月の調査は、古佐田村・橋本町の家数の総数を148家としている²⁸⁾。この内、5家が「小佐田本役」、57家が「橋本本役」の家とある。次いで享保元年(1716)の調査は、古佐田村・橋本町を併せ

て計317軒の家数があり、この内、橋本町家は218軒で、93軒が本役、125軒が半役としている。一方古佐田村では99軒の家数があったとされるものの、このうち庄屋・肝煎と本役を合わせても14軒にとどまり、残りの85軒は無役だったという。

享保元年の調査において「本役」「半役」「無役」という三つのカテゴリーに分けて家数が記述されている点に、特に着目したい。一般に万治3年(1660)の「総改め」以降の和歌山藩領の村々では、この「本役」「半役」「無役」というカテゴリーが存在し、家々は何れかのカテゴリーに分類されていたという。また、各家を分類するに際しての藩全体の統一的基準はなく、各村ごとに決められていたのではないかと推定されている²⁹⁾。

橋本町では「本役」「半役」の二つが設定され³⁰⁾、「半役」が「本役」を数的に上回っている点が注目値するだろう。一方、古佐田村では、圧倒的に「無役」の家々が多い点に着目したい。それでは、これらのカテゴリーは、町並みの構成や形成過程といかなる対応関係を持っていたのだろうか。史料上の限界はあるが、最後にこの点を検討する。

2) 住民社会の構成と町並みの関係

本役・半役とその分布 この点で参考になるのは、明和7年(1770)に起きた火事についての記録である³¹⁾。同年閏6月28日夜に川原町から出火した火事は大規模なものとなった。この時に被災したのは、「半役家」49軒であり、火元の1軒を除いた48軒に対して材木・救米が下賜されると同時に、拝借米・拝借銀が貸し付けられている。このため、被災世帯についての書上げ³²⁾がのこされたのである。この書上げの末尾によれば、被災した「家数」は「廿七軒」(内1軒は「小家」)であり、「此竈四拾九軒」であった。すなわち、焼けた建物の棟数が27棟であり、焼失した「半役家」49軒とは、世帯数を意味していたことになる。

それでは、彼らが居住した建物はいかなる形式のものだっただろうか。史料からは様々な形式の住居が存在したと推定される。たとえば、

無高入
一、同 宅軒
半役 茂兵衛
" 孫七
" 五郎兵衛

と記されるケースでは、3世帯が一つの建物に居住したと推定される。この場合は長屋建築だったとみて良いだろう。しかし、むしろ、

表4 明和火事被災家屋の世帯数別棟数

1棟あたり世帯数	1	2	3	4	5	6	計
棟数	16	4	5	1	0	1	27

図7 「(橋本宿割図)」

所持高三斗余
(半役) 基六
一、同 老軒

のように1軒の住宅に1世帯が住んでいる例、すなわち独立住宅に住居していたとみられるケースの方が多く、16例にも及んでいる(表4)。

このことから、「半役」という役負担の基準は、長屋か独立住宅かといった住宅の形式とは直接の関係がなかったことになる。また、この時に焼け出された家のすべてが「半役」だったことを念頭におくと、屋敷持ちか借家人かなどの家屋や土地の所有状況の相違が原因で「本役」「半役」が分かれていたわけでもないのではないかと³³⁾。これだけの規模の火事が偶然に借家だけを襲ったとは考えにくいからである。

むしろ先の書上げが、川原町の大きな被害を記す一方で、「尤御殿所并往還筋、別条無御座候」と記していることに着目したい。橋本御殿や往還(街道)筋の家々は別状なかったというのであるから、この「半役」の家々はすべて「往還筋」以外の場所にあったことになる。

「半役」とは、街道筋の両側町の背後に位置する川原町や裏町の家々に対して課された役ではなかったか。裏町に設定された役について史料は語っていないため確証を得たとは言いがたいが、ここではこのように考えておきたい。

その上で、古佐田村では無役の家々が卓越していたことを想起すると、本役を負担する大和街道沿いの中町・横町・西町の家々の領域を町並みの主軸としながら、川原町・裏町・古佐田村の家々がこれの背後に取りつくような構造が当該地域において空間的・社会的に形成されていたとみることができるだろう。

18世紀中期の絵図にみられる町並みの構成 以上に述べてきた橋本の町の形成過程についての知見をヴィジュアルに確認できる史料として、新たに市史編纂委員会により発見された絵図(「橋本宿割図」)、図7³⁴⁾を瞥見しておくこととしたい。これまで知られていた絵図³⁵⁾と異なり、近世段階の橋本を詳細に示すものとして極めて貴重な史料だからである。この絵図は年紀を欠いているが、図に記入された武士名により元文3年(1738)から宝暦6年(1756)までの期間、すなわち18世紀中期の橋本を描くと推定することが可能である(図8)³⁶⁾。

まず、道に注目すると、大和街道はもちろんのこと町内部の路地も明治の地籍図に記されたものと共通していることが判明する。それらの路地の成立の古さが確認されると同時に、本図がかなり正確に町並

みの構成を伝えていることを推測させるものである。

つぎに居住者名が書き込まれた家々のうち、明治初期の地籍図が示していた旧橋本町の範囲内のものを数えると、その数は129であることが分かる。大和街道沿いには古佐田村に属する家々も続いているが、これらを含めても計155に過ぎない。表2で検討した数値と比べると、この家数は18世紀中期のものとしては一見少ないように思われる。

ただし、この数がそのまま当時の世帯数とみることはできないであろう。注目されるのは、川原町や裏町一帯に「小屋」と記された家が集中して立地していることである。原則的に居住者名は書き込まれていないが、おそらくこれらの「小屋」にも多くの世帯が居住していたのであろう³⁷⁾。先述の半役の世帯はこのような「小屋」に居住していたのではないだろうか。

最後に同図から改めて町並み全体の特徴をみると、すでに大和街道沿いに両側町が密度高く形成されていることに気づかされる。一方で、「小屋」の建ち並ぶ川原町や裏町の建築物の密度は低い。両者の差異は明瞭であるといえよう。このように表現された町並みの状態から、①街道沿いに比べて川原町・裏町が相対的に遅く成立したこと、②同図の描く18世紀半ばから地籍図の示す明治初期に至るまでに、特に川原町・裏町の町並みが充実していったことの二点を読みとることができるだろう。

おわりに

本論文での検討により、裏町や「新畑」が集中する川原町一帯は、大和街道沿いの両側町に比べて相対的に開発が遅いことが、ほぼ明らかになったのではないかと。おそらく、まず最初に大和街道沿いの両側町(中町・横町・西町)が木食応其によって町割りされ、ここに位置する屋敷の居住者が「本役」をつとめることになったものと思われる。その後裏町や「新畑」の集中する川原町の地区が開発され、「小屋」が建設されて、その住民が「半役」を負担することになったのであろう。

ただし、「半役」の家々が集中した地区が、大和街道沿いの両側町に対してただ従属的な関係にあったわけではないということを強調しておきたい。特に川原町の家々の実力は高く評価しておくべきものと思われる。ここでは十分に述べるができなかったが、現在も続いている祭りである「船だんじり」を支えるのは、川原町の地区の家々なのである。そして、彼ら自身で古文書を伝えて行くだけの自治能力を備えていた³⁸⁾。むしろ、街道沿いの家々に対する第二の勢力として結束し、力をつけていったものと推測される。

一方古佐田村は、近世初頭には極めて小さな村として出発した。この時点での村の空間的な構成や位置などは判然としないが、17世紀後半以降、古佐田村は橋本町で吸収しきれなくなった家々を受け入れる形で橋本町と連続する市街地を形成した。こうして、橋本町・古佐田村は空間的・社会的に一体的存在となっていくものと思われる。ただし、古佐田村の大多数が「無役」の住民だったことを考慮すると、橋本町と古佐田村が対等な関係にあったとは言いがたいであろう。

以上のように、橋本は町立て後に積み重ねた長い歴史の中で、複雑な社会と空間を形成して来た。魅力的な町並み景観が現在もお残されているというだけでなく、このような歴史の経緯そのもの、そしてその経緯を豊富な史料と共に辿ることができるということが、橋本の貴重な財産であると筆者らは考える。積極的に町並みを保存・継承するような方策はないか、住民の方々と可能性を模索していきたい。

図8 「橋本宿割図」に記載されている武士名と同図の内容年代

<注>

- 1)調査結果は、橋本の町と町家の研究会編『橋本の町と町家』(橋本市, 2002年)にまとめられている。本論文は同書第4章第1節「町並みの形成と展開」に、新たな知見を加えて再構成したものである。関連の調査データ等については、同書を参照して頂きたい。なお、本調査に際しては、橋本市のほか、大成建設自然・歴史環境基金、文部科学省科学研究費、財団法人住宅総合研究財団、財団法人ユニオン造形文化財団の研究助成を得た。記して感謝の意を表する。
- 2)『和歌山県史』(近世, pp.191-194, 1990年)。
- 3)廣本満「紀州藩の伝馬制」(安藤精一先生退官記念会編・発行『和歌山県地方史の研究』, pp.331-355, 1987年)。紀州 38 伝馬所内で最大の 66 疋の伝馬を備えていた。
- 4)『南紀徳川史』(第十七冊, 巻 169, pp.964-967, 1933年)。
- 5)『日本塩業大系』(近世[稿], pp.402-403, 日本専売公社, 1982年)、安藤精一『近世在方商業の研究』(吉川弘文館, 1958年)。
- 6)前掲『和歌山県史』(近世, p.192)。
- 7)これらの「町」が共同体としてどの程度の実力を持っていたかまでは十分に明らかにすることが出来なかった。しかし、例えば川原町は自身で古文書を持ち伝えており(『橋本市史』[中巻, pp.670-671, 1974年]に文書目録が収載されているが、現在その所在は不明)、一定の自治能力を備えていたものと推定される。
- 8)なお、近代の地図によると、一見橋本町は東家村とも連続した都市域を形成していたようにみえる。しかし、両者の間には橋本川が流れており、空間的には截然と分かたれていた。また、東家村とは様々な争論において敵対する関係にあることが確認される。したがって、以下では東家村との関係については特に触れずに論を進めることにする。
- 9)前掲『和歌山県史』(近世, pp.647-651)。
- 10)橋本の町についての文献史料は、『橋本市史』(上・中・下巻, 1974年)、『和歌山県史』(近世史料二, 1980年)及び『日本塩業大系』(史料編近世三, 日本専売公社, 1977年)に、既に相当数が翻刻されている。本研究ではこれらの刊本史料に加え、現在進行中の新市史史料集(『橋本市史』[近現代史料1・2, 2001/2003年]が刊行済み)の編集業務に際して収集された近世・近代史料の写真版を参照させて頂いた。以下で引用する史料のうち、刊本名が記していないものはこの写真版によるものである。閲覧に際し、全面的に御協力頂いた市史編集委員会の諸氏に感謝の意を表したい。
- 11)土屋家文書(橋本市立資料館寄託)。年紀はないが、図中に「第四大区三小区」とあることから、明治5-12年(1872-79)の期間に作成されたとみることができる。
- 12)この点は聞き取りによっても確認されるが、正確な境界は明らかでない。
- 13)前掲『橋本の町と町家』(pp.537-538)。
- 14)現在の地籍図では、もと御殿があった部分も川原町に加えられているなど、完全に一致するわけではない。
- 15)橋本町が古佐田村内に町立てされたという通説は、このような橋本町と古佐田村との領域の関係からもうなずけるものである。
- 16)「(橋本古図)」(谷口家文書)。なお、同図には年紀はないが、大岡康之氏の御教示によると、文化11年(1814)建立の「東家渡場常夜灯籠」及び明治43年(1910)に廃寺となった浄泉寺が描かれており、両年の間の景観を描いたものである。
- 17)村木家文書(前掲『橋本市史』[近現代史料1]及び同『橋本の町と町家』に全文翻刻)。
- 18)当該地域一帯では慶長6年に検地が行われた。橋本町の検地帳は現存していないが、後述のとおり同年に検地が実施されたものと推定される。
- 19)一般に、当該地域の検地帳には、同様の地番が記入されている。橋本町の検地帳は現存していないが、享和二年(1802)の土地売券状(前掲『橋本の町と町家』pp.571-572)にも「四十八番」「四十八番之内」という地番が登場しており、近世の段階で既に用いられていることが知られる。また、柏原村の「慶長六年紀州伊都郡相賀庄柏原村御検地帳」(元禄10年[1688]写、橋本市史編纂室寄託)では、書き上げられた土地に番号は振られていないが、慶長検地の所有者と元禄6年(1693)段階の所有者の両者を収載する「慶長六年・元禄六年御検地帳写」(同編纂室寄託)では一筆毎に地番が記されている。柏原村の例を参考にすれば、17世紀には地番が付されていたとみて良いのではないだろうか。また、断定はし兼ねるが、この地番は慶長検地をも遡る可能性もある。「十六」「十六之内」のように、検地帳の所有者名が異なるものも多数あるからである。安藤精一「紀州の検地」(『紀州経済史文化研究所紀要』3, pp.155-173, 1983年)によると、当該地域で天正後期に太閤検地が行われた可能性があるため、この推定も排除できない。
- 20)なお、裏町に位置する83から87番までの敷地には検地帳所有者名の記載がない。慶長期以降にこれらの屋敷地が新たに造成された可能性もあるが、詳細は不明である。
- 21)34・65・68及び100-103の敷地は、中町・西町・川原町などに散在する敷地であり、いずれも街道に面した敷地の背後に位置する。
- 22)応其寺文書450。
- 23)前掲『和歌山県史』(近世, pp.28-29)。なお、この慶長検地については多くの研究が取り上げているが、代表的なものとして、速水融「紀州慶長検地および検地帳の研究」(『土地制度史学』1-3, pp.19-32, 1959年)、渡辺広「紀州藩における皮田部落の成立と展開」(安藤精一編『和歌山の研究』2, 古代・中世・近世篇, pp.247-274, 清文堂, 1978年)、前掲安藤精一「紀州の検地」がある。
- 24)「慶長六年伊都郡東家組御検地帳尻帳(写)」(堀江家文書、前掲『橋本市史』上巻, pp.750-792)。各村の検地結果を集計した検地帳末尾の部分(尻)のみを集成した史料である。ただし、橋本町の検地結果はこの史料には収載されていない。このことから、『橋本市史』(同, p.613)は橋本町の検地結果は「古佐田村に含まれていたものと思われる」との推測を行っている。前述の慶長期の家数を5軒とした『和歌山県史』の記述もこの『橋本市史』の解釈に依拠するものであるが、本論文での検討からこの解釈が誤りであることが判明した。
- 25)渡辺広「慶長検地以降の戸口推移—伊都郡かつらぎ町域を中心に—」(安藤精一先生退官記念会編・発行『和歌山県地方史の研究』, pp.217-237, 1987年)によれば、古佐田村・橋本町の属する伊都郡東家組(上組)では、慶長期から天保期にかけて家数が平均でほぼ倍増している。橋本町・古佐田村の増加はこれを大きく上回っていたことになる。
- 26)「切支丹宗門改判取帳写」(応其寺文書315)。本史料は、宗門改帳をもとにして作成された史料であるが、世帯主の名前のみを列挙している。したがって、各家族の構成まで知ることはできない。
- 27)貞享5年(1688)に作成された謄状(前掲『橋本の町と町家』p.570)によると、同年の時点で、「借屋式間二七間之座敷、此内二家三軒有」という形式の借家経営が行われていた。敷地の所在地は不明だが、17世紀後半段階での都市化の一局面を示すものといえるだろう。
- 28)若干時期は下がるが、明暦元年(1655)2月19日の大火で、古佐田村と合わせて132軒の家々が焼失したことが知られる(「川原町焼失之覚書」『年代記』礼の巻・ぬ、堀江家文書、前掲『橋本市史』上巻, pp.895-903)。当時、この数以上の家が古佐田村及び橋本町に存在していたことは確かであろう。
- 29)前掲『和歌山県史』(近世, pp.225-228)。
- 30)「享保元年御巡見様御尋之時に可申上口上書覚」(関谷家文書、前掲『橋本市史』中巻, p.404)には、「一、役米之事 当村は傳馬所相勤め申候に付、諸役御免之引高にて御座候故、役米は出し申さず候」とある。この文言から判断すると、他の村々のような役とは異なり、橋本の人々が担った「役」とは「伝馬役」を意味していたのではないかと考えられる。
- 31)前掲「川原町焼失之覚書」。
- 32)「伊都郡橋本川原町火事之節類火之者・家数燬書上帳」(前掲「川原町焼失之覚書」所収)。なお、拝借米は間口1間あたり米7升5合と決められていたため、拝借米の貸し付けられた48世帯についての総間口が115間だったことも判明する。1世帯あたり平均の間口は約2.4間となる。住居規模の点でも「半役」の家々は相対的に小規模だったのではないかと推測される。
- 33)三尾功「近世都市和歌山の研究」(pp.191-208, 思文閣出版, 1994年)によれば、和歌山城下では、一般の近世都市と同様「家屋敷所持者」が原則として町役を負担している。橋本是和歌山藩支配下では同じ「町方」だったとはいえ、異なる負担方式を採用していたことになる。
- 34)「(橋本宿制図)」(応其寺文書)。こうした図が作成されたのは、橋本で宿泊する和歌山藩一行の宿割が目的だったと推定される。図は橋本の家屋を貼紙で表現し、そこに居住者名を記入した上で、さらに寄宿する武士の名称を付箋で示している。多数の武士名が図上で確認されることから、参勤交代のような大規模な藩の移動の途次の宿割と思われる。ただし、図の内容からだけでは、藩主も共に滞在していたのか否か等が不明であるため、この図が作成された直接の目的を今これ以上追求することはできない。なお、和歌山藩の参勤交代のルートは、延享元年(1744)までは大和街道を経由するのが主であったというから(前掲『和歌山県史』近世, pp.558-559)、実際に参勤交代の際の宿割として作成された可能性もある。
- 35)江戸時代の橋本を描く古絵図としてこれまで知られているものに、「橋本・東家見取図」(『ふるさと橋本市』[橋本市, 1985年]がトレース図を収載)があるが、原図の所在は現在不明となっている。同図は、辻田豊「元禄五年の「橋本・東家見取図」再検討」(『橋本歴史研究会報』87, pp.1-2, 1998年)によれば、元禄5年(1692)の高野騒動に関連して作成されたものである。僧侶たちの牢などを描くのが目的であるため簡略な絵図であり、町の形成史に使用するには情報量が限られている。しかし、現在の川原町の付近に「河原」との書き込みが行われ、建築物がほとんど描かれていないことは、川原町の成立が相対的に遅いのではないかと推定する補強材料となる。
- 36)図8は、絵図に名前が記された武士の中から10名を選び、それらの武士名が共通して使用されていた時期を見出そうとしたものである。ここでは時間的制約及び史料閲覧上の制約により果たせなかったが、検討事例を増やすことにより、さらに推定期間を狭く絞り込むことも可能である。
- 37)ただし、同図がいわゆる「貼絵図」の形式で作成されている事には注意しておくべきかもしれない。絵図の作成時には、より多くの建築物があるように作成されていたにもかかわらず、その後剥落して現況のような状態になっているという可能性も否定できないのである。したがって、他の史料との関連に注意しながら絵図を慎重にみるという姿勢は崩すべきでないだろう。
- 38)7)参照。

(2003年8月26日原稿受理, 2004年4月6日採用決定)